

はじめに ー 学校・地域連携の目指すもの ー

近年、地域の人たちとの連携協力によって子どもの教育を充実させようという動きが広まっている。横浜市でも、学校教育の充実・多様化や地域の教育力の向上を目指し、地域住民の参画による学校支援活動を推進するため、学校支援ボランティアと学校との調整役を担う「学校・地域コーディネーター」を養成する講座を中心に、「学校・地域連携推進事業」を実施している。こうした背景には、ボランティア活動に対する一般の関心が高まる中で、「子どものためなら協力してあげたい」と考える人が増え、その実践の場として地域の学校が注目を浴びていると考えられる。

「学校」と「地域」という全く異質の機能・役割をもつもの同士が連携・協力することは、簡単ではないが、それゆえにこそ、「子どもの成長」としては重要な意義がある。子どもは、様々な人たちと日常的に関わりあってこそ豊かに成長するのである。こうして考えると、「学校」と「地域」を結びつける「学校・地域コーディネーター」の存在が大きくクローズアップされる。その在りようは、まさにこの会議でも終始議論のテーマであった。

I 学校・地域の連携の意義

(1) 子どもの豊かな成長をささえる

子どもの「生きる力」を育むことが、重要な社会的課題としてクローズアップされてきており、学校関係者と地域住民が協力することで、「他者との信頼関係の構築」や「多様な人々とのコミュニケーション」を充実することが求められている。

(2) 学校教育の充実を図る

教員が、多忙化により子どもと向き合う時間が少なくなっているとともに、総合学習など、子ども自身が自ら考え課題を解決するような学習が取り入れられており、学校現場でも、学校支援ボランティアなど教育活動や学校の運営に協力してくれる人を必要とするようになっている。

(3) コミュニティへの市民の参加を促す

「子どもの成長」というテーマは、多くの地域住民にとって共有しやすいテーマであり、学校・地域の連携による活動は、地域での活動に潜在的に関心をもっている人たちに、「子どもの成長」を共通のテーマとして、学校や地域での活動に参加する機会を提供するものといえる。

(4) 豊かな人間関係をコミュニティに広げる

学校・地域の連携による活動は、ネットワーク機能や交流機能を内包する活動であり、ボランティア自身の自己実現に加えて、住民同士の学び合いの場を地域に広げ、地域に多面的な信頼関係を蓄積することにつながるものである。

II 学校・地域連携の現状と課題

(1) 学校支援ボランティア活動への参加について

横浜市では、小学校ではほぼ全校、中学校では73.6%の学校で、学校支援ボランティア活動が行われている。主な活動内容は、小学校では「読み聞かせ・図書室整備」や「登下校時の見守り活動」、「授業のサポート」が多く、中学校では、「部活動・クラブ活動の指導」や「校内環境整備」、「キャリア教育や体験学習」が比較的多く実施されている。

(2) 学校側の対応について

一部には、業務多忙等を理由として、学校・地域連携に積極的ではない学校があったり、管理職の異動に伴い、これまで取り組んでいた連携活動が止めさせられてしまったりするケースもある。

(3) 連携の際のコーディネーションについて

コーディネーターが活動しやすい環境整備の課題として、学校は、「専用電話やパソコンの設置」、「経費の充実」を、コーディネーターは、「コーディネーターの認知度の低さ」をあげている。このほか、「地域連携を担当する教員が、専任でない場合が多く、時間が取れないこと」や、「打合せの場所が確保できないこと」なども課題と感じている。

(4) 学校・地域コーディネーターの養成と配置について

コーディネーターは、学校と地域の連携を進めていく上でキーパーソンとなる役割を担うものであり、学校や地域の実情に応じて、養成・配置を行うことが重要である。

(5) 学校支援地域本部事業や学校運営協議会について

学校支援ボランティアの組織化は、学校・地域の連携の充実にとって極めて重要であり、それぞれの学校・地域の実情や地域住民の関心等を踏まえ、既存の事業の活用を図ったり、学校支援地域本部事業の充実を図ったりしていくことが重要である。

また、学校運営協議会については、今後は、数値目標を掲げて増やしていくのではなく、学校や地域の意向を踏まえて設置を進めていくべきと考える。

III 今後の展望

学校と地域の連携は、学校・保護者・地域住民の三者が協力して子どもの成長発達を支えることにより、子どもたちの成長発達の状況や学校・地域が抱える課題などについての共通理解をもたらし、肥大化した学校の機能の一部を、本来そうした機能を担うべき保護者や地域住民のもとに戻すことにもつながり、学校の機能の Slim 化にも貢献する。

教員にとっては、学校・地域の円滑な連携が、教員の負担軽減をもたらすとともに、教員以外に教育活動に参加する人がいることで、細かいところまで目配せのきいた教育活動が実施できる。

保護者や地域住民にとっては、今まで知らなかった人同士が知り合うきっかけになり、相互のつながりが生まれるとともに、地域の行事や活動に参加・加入したりするきっかけになる。

こうした多様な人たちとの関わり合いの中でこそ、子どもたちは、自らが生まれ育つ地域の文化にふれ、大人とともに地域社会を創っていく主体として成長していくのである。

学校・地域の連携は、「子どもの成長」というテーマを接着剤として、子どもの成長や学校教育の充実に加え、教員・保護者・地域住民の意識や行動を変え、生活をより豊かにし、子どもと大人が協力してより住みやすい地域社会を創出する営みである。

おわりに ー 学校・地域連携の充実に向けて ー

学校・地域連携の充実を図るためには、これに関わる学校・保護者・地域住民といった三者が、相互の関わりの中で自らの課題を発見・整理し、それらの解決に向けて努力することが望まれる。

多くの地域住民に学校支援ボランティア活動に参加してもらうための取組例

- 学校側のニーズを踏まえ、面白そうなテーマや活動内容を選び、それを地域に発信していく。
- 行政も、積極的に学校・地域連携の意義やボランティア活動の成果の周知を図っていく。

学校・地域コーディネーターに関する支援策の例

- 各学校において、コーディネーターが活動しやすいように、学校・地域連携による活動を年間の行事予定等に組み込んでおく。
- 各学校において、コーディネーターが担当する役割をあらかじめ決めておき、皆に周知しておく。
- 学校だよりやホームページなどの活用を通じて、学校と地域との双方向の情報の流れを作り、学校側と保護者・地域住民との相互理解を深めるとともに、コーディネーターの認知度を高める。
- ボランティアやコーディネーターとの連絡調整を担当する専任教諭を配置するなどの方策を検討する。
- ボランティアやコーディネーターの打合せや準備作業の拠点となる地域交流室を整備したり、ボランティア活動を経費面から支援したりする。
- コーディネーターの養成・配置を、学校や地域の実情を踏まえつつ、現在の計画よりも高いレベルでの達成に向けて推進する。
- コーディネーターを配置する際には、関係する学校の教職員を対象に、地域との連携の理解を深めるための研修会などを開催する。

学校・地域連携を継続し、活動内容の充実を図っていくための取組例

- コーディネーターをネットワーク化し、自身の活動の成果や直面している課題等について情報交流を進める。
- 活動の成果を積極的に周知するなどして、学校支援ボランティアの自己効力感を高める工夫をしていく。